一橋大学連携講座

日本統治期台湾文化史に見る台湾人の足跡

—1930 年代の映画・音楽・弁士を読み解く—

講師 ： 原口 直希

（東京大学大学院博士課程／一橋大学言語社会研究科修士修了）

と　き： 1月25日～3月1日　全5回

いずれも土曜日、午後2時～4時

ところ： 公民館3階講座室

定　員： 30名（申込先着順）

5回連続で参加できる方を優先します

申込先： 12月12日（木）朝9時～

公民館　☎ 572-5141

もしくは右の二次元コードから

「Taiwanese marketplace」より繁華街の様子

1895(明治28)年から1945(昭和20)年のおよそ50年間、台湾は日本の植民地でした。統治下で育まれた文化とはどのようなものだったのでしょう？　植民地である以上、差別は存在し、台湾人が日本人に不満を抱くことは当然です。では文化においても、その不満が見て取れるのでしょうか？　他方で元総統の李登輝さんなど、当時を生きた日本語世代の台湾人は日本文化の愛好者とされています。それでは文化にも「親日」が見て取れるのでしょうか？

この講座では映画・音楽・弁士といった1930年代の台湾における大衆文化を、当時の映画やレコードなどから読み解いていきます。さらに第3回では統治下の台湾で14歳までを過ごした、新元久さんのお話を伺います。文化のなかに見られる台湾人の足跡を、皆さんと共に考えます。

◆第1回：1月25日（土）

「日本統治期台湾文化史概説：協力？抵抗？それとも？」

◆第2回：2月1日（土）

「映画主題歌《桃花泣血記》(1932年)の新奇性」

◆第3回：2月15日（土）

「『湾生』の見る日本統治期」

ゲスト講師　新元久

※「湾生」とは、統治下の台湾で生まれ、戦後引き上げた日本人のこと。

◆第4回：2月22日（土）

「台湾人弁士 詹天馬に見る両義性」

◆第5回：3月1日（土）

「映画『義人呉鳳』(1932年）のプロパガンダ作用」

主催：国立市公民館／一橋大学言語社会研究科

この掲示物は、市が主催する講座のため許可期限の押印はしていません。・掲示期限は2025年3月1日です。

本講座はJSPS研究課題/領域番号24KJ1539および松下幸之助記念志財団2024年度研究助成による研究成果の一つです。